平成１９年度卒業論文　　原　諒子

花を生かした観光による地域への影響について
―埼玉県幸手市権現堂桜堤を事例として―

近年、ニューツーリズムと呼ばれる新しい観光形態が注目されており、地域独自の自然や文化を生かした観光地作りが盛んになっている。地域住民や地元の企業などが主体となってかかわることにより、より地域の活性につながっていくとも考えられている。そこで特に多くの地域が力を入れている花観光を取り上げ、それによって地域にどのような影響があるのかを考えた。

研究方法は、主にヒアリング調査で、特に住民による花観光地作りに力を入れている埼玉県幸手市権現堂桜堤を主な研究対象地とした。

花観光には、花を見に行く旅行というだけでなく花をツールとした観光地作りという側面が含まれる。従来の花見とはこの点で異なるのではないかと考えた。花観光の需要は平成１４年頃から年々増加しており、観光白書などによると、ニューツーリズムの中でもヘルスツーリズムやフィルムツーリズムと比べ多くの人がフラワーツーリズムに行ってみたいと答えている。フラワーツーリズム推進協議会（日本観光協会による）では、毎年行われている花の観光地作り大賞において、花の見せ方などの優秀な地域を表彰している。

埼玉県幸手市は人口５万４千人で、茨城県と千葉県に隣接している。江戸時代は宿場町として栄えており、現在は緑多き首都圏近郊の住宅都市である。市内を流れる権現堂川の堤に桜が約１千本植えてあり、毎年３月から４月にかけて行われる桜祭りには７０万人が訪れる有数の桜の名所となっている。また、堤内には桜だけでなくあじさいや曼珠沙華、水仙も植えており、それぞれ時期になると祭りが開催され、一年中花を楽しむことができるようになっている。このような堤の管理や祭りの運営は、ＮＰＯ法人幸手権現堂桜堤保存会によるものであり、この保存会はすべて幸手市と近郊の住民により構成されている。そこで、保存会の副理事長の並木さんと幸手市役所の方にヒアリングをしたところ、祭り以外の市からの補助金はなく、すべて保存会費と募金によって活動している。それも今年（平成１９年）は桜祭りに約７５万人、あじさい祭りに約３５万人、曼珠沙華祭りに２７万人とそれぞれ前年に比べると１０～１５万人ほど観光客が増えている。心の癒しやリラ

ックスなど、純粋に花を見に行きたいという人が増えているといえる。観光客の増加に比例し、幸手市内の住民ボランティアも年々増えており、今年は年間約１５００人が球根植えやごみ拾いなどのボランティア活動に積極的に参加した。また、早朝や夕方堤を散歩しに来る住民が増えたり、祭りのために桜などにちなんだ商品を販売する地元の物産展が店を閉めずにいたりと、堤が住民にとって大きな存在となってきたこともわかった。

　したがって花観光は、花を見に行く人にとってだけでなく、花作り・観光地作りに住民がかかわることによって新たなコミュニティの生成・強化や地域への愛着が生まれるなど、地域活性に大きな影響を与えると考えた。